

平成 30 年度 異常気象分析検討会（臨時会）議事概要

1. 開催日時

平成 30 年 8 月 10 日（金） 13:10～15:25

2. 開催場所

気象庁大会議室

3. 出席者

別紙 1 のとおり。

4. 議題及び検討結果の概要

下記の議題について検討を行った。

（1）「平成 30 年 7 月豪雨」をもたらした大気循環場の特徴の分析

「平成 30 年 7 月豪雨」の特徴とその要因について検討を行い、その分析結果を別紙 2 のとおり取りまとめた。

（2）7 月中旬以降の記録的な高温をもたらした大気循環場の特徴の分析

7 月中旬の顕著な高温の特徴とその要因について検討を行い、その分析結果を別紙 2 のとおり取りまとめた。

（3）今後の見通し

7 月 25 日発表の 3 か月予報や、8 月 9 日発表の 1 か月予報などにもとづき、今後の天候の見通しを確認した。

平成 30 年度 異常気象分析検討会（臨時会） 出席者

異常気象分析検討会 委員

- | | |
|------------------------------------|----------------------|
| ◎ <small>なかむら ひさし</small>
中村 尚 | 東京大学先端科学技術研究センター 教授 |
| ○ <small>むこうがわ ひとし</small>
向川 均 | 京都大学大学院理学研究科 教授 |
| <small>いわさき としき</small>
岩崎 俊樹 | 東北大学大学院理学研究科 特任教授 |
| <small>かわむら りゅういち</small>
川村 隆一 | 九州大学大学院理学研究院 教授 |
| <small>きもと まさひで</small>
木本 昌秀 | 東京大学大気海洋研究所 教授 |
| <small>たかやぶ いずる</small>
高薮 出 | 気象研究所 研究総務官 |
| <small>たかやぶ ゆかり</small>
高薮 縁 | 東京大学大気海洋研究所 教授 |
| <small>たにもと よういち</small>
谷本 陽一 | 北海道大学大学院地球環境科学研究院 教授 |
| <small>ひろおか としひこ</small>
廣岡 俊彦 | 九州大学大学院理学研究院 教授 |
| <small>ますもと ゆきお</small>
升本 順夫 | 東京大学大学院理学系研究科 教授 |
| <small>わたなべ まさひろ</small>
渡部 雅浩 | 東京大学大気海洋研究所 教授 |

※向川委員は WEB 会議システムを通じて参加

(◎：会長、○：会長代理、敬称略、会長・会長代理以外は五十音順)

その他の出席者

- | | |
|----------------------------------|-------------------|
| <small>つばき かずひさ</small>
坪木 和久 | 名古屋大学宇宙地球環境研究所 教授 |
|----------------------------------|-------------------|

気象庁

地球環境・海洋部長、地球環境業務課長
気候情報課長、エルニーニョ情報管理官、予報官
異常気象情報センター所長、予報官
海洋気象課長、海洋気象情報室課長補佐、環境気象管理官
予報部予報課長
気象研究所予報研究部
気象大学校

関係官

(「平成30年7月豪雨」)

- 「平成30年7月豪雨」では、西日本から東海地方を中心に広い範囲で数日間大雨が続き、その総雨量は1982年以降の豪雨災害時の雨量と比べて極めて大きいものとなった。
- 7月5日から8日にかけては、西日本付近に停滞した梅雨前線に向けて、極めて多量の水蒸気が流れ込み続けるとともに、局地的には線状降水帯が形成された。
- この広域で持続的な大雨をもたらした要因は、梅雨前線が、非常に発達したオホーツク海高気圧と日本の南東に張り出した太平洋高気圧との間に停滞したことである。それぞれの高気圧の強まりには上層の寒帯前線ジェット気流及び亜熱帯ジェット気流の大きな蛇行が持続したことが影響した。
- 今回の豪雨には、地球温暖化に伴う水蒸気量の増加の寄与もあったと考えられる。

(7月中旬以降の記録的な高温)

- 7月中旬以降は北・東・西日本では気温がかなり高くなり、東日本の月平均気温は7月として1946年の統計開始以来第1位となった。
- 7月中旬以降の記録的な高温は、太平洋高気圧と上層のチベット高気圧がともに日本付近に張り出し続けたことが要因である。これは、上層の亜熱帯ジェット気流が、強弱を繰り返しつつ、北に大きく蛇行し続けたことと、フィリピン付近の積雲対流活動が平年より活発だったことが影響した。
- 地球温暖化を反映した気温の長期的な上昇傾向に加え、今春以降持続的に、北半球中緯度域で対流圏の気温が全体的に顕著に高いことも、記録的な高温に影響した。この一因として、北半球熱帯付近の海面水温が平年より高く、積雲対流活動が北半球側で平年より活発だったことが挙げられる。